

知っておきたい最新教育ニュース

自民党教育再生実行本部長の遠藤利明さんに聞く

今後の教育再生

人材育成のための教育改革について、教育再生のカギを握ると言われる遠藤利明さんに
本誌アドバイザーが最新情報を聞いた。



アドバイス
衆議院議員
遠藤利明さん

えんどう・としあき／1950年、山形県上山市生まれ。中央大学法学部卒。文部科学副大臣、自民党幹事長代行など歴任。現在、自民党・教育再生実行本部長。政府・教育再生実行会議委員。

センター試験にTOEFLを取り入れる改革とは

石井 遠藤さんといえば、今年4月に自民党の教育再生実行本部として、大学入試センター試験の英語を廃止してTOEFLを導入するという思い切った改革を提言したことで有名ですね。

遠藤 さまざまなご意見をいただきましたが、8割は反対でしたね。「TOEFLという外国の評価を日本でするのはおかしい」「実際の教育の現場は追い付かない」「英語よりもまず日本語じゃないか」「TOEFLは難しすぎる」「TOEFLは値段が高すぎる」などです。それぞれの意見に対する反論は持ち合わせていますが、ここではないいちいち申し上げません。

ただ、少なくとも言えるのは、

今のままでは日本人の子どもたちの英語は上手にならないということです。

また、TOEFLという言葉が一人歩きしていますが、TOEFLに限定するつもりはありません。提言の中でも「TOEFL等」と「等」を入れていきます。例えば、ブリティッシュ・カウンシルが運営するIELTSも活用すべきだと思っています。各テストの点数を換算する仕組みも必要でしょう。

教育再生実行会議で行われる学制改革

石井 最近のニュースを見ると、自民党の教育再生実行本部のことは話題にならず、政府の教育再生

実行会議ばかりが報道されています。

遠藤さんも、政府の会議の委員もなさっておられますが、両者の関係はどうなっているのですか？

遠藤 私が党の教育再生実行本部長になってから、今年4月に「グローバル人材育成」として英語教育の抜本的改革などを提言しました。5月には「大学・入試の抜本改革」、いわゆる6・3・3の「学制改革」、教師の養成などに関わる「人材確保」について提言しました。政府の教育再生実行会議では、党で行った四つの提言を政府としてどう実行していくかを議論するという位置付けです。

実際、これまでにすでに英語教育と入試改革の二つは政府の実行会議が提言を発表しました。今は、まさに学制改革の議論に入ったところです。

石井 11月の政府の入試改革の提言はセンター試験の代わりに、「到達度テスト」を新たに設けてはどうかという発表でした。これは、高2で学習到達度はかかる「基礎」テストを行い、推薦・AO入試に使われます。高3で行う「発展」テストは一般入試のためのものです。どちらも複数回受験できるようですが、個人的には1種類で十

分ではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

遠藤 私もそう思いますので、これから文科省と検討することになります。また、この議論は国立大学を基本とした話なので、私立大学は独自に入試をしてもらって構いません。もちろん、この仕組みを活用していただくのは大歓迎です。

石井 TOEFLなどの英語試験を導入するということは、センター試験の代わりになる「到達度テスト」には英語の試験がなくなるということですか？

遠藤 そうです。TOEFLなどの試験は大学の「受験資格」になります。「○○大学ではTOEFL△点以上が受験資格」となります。もちろん、各大学がその点数を自由に設定できます。例えば、A大学ではTOEFL 20点を受験資格



インタビュー
本誌アドバイザー
石井 至さん

東京都市大学付属小学校学校評議員、幼児教室アンテナ・プレスクール校長などの仕事を通して今後の日本の教育改革に力を注いでいる。

としてもいいし、B大学では50点にしてもいい。

あまり言われていませんが、大学の卒業要件にもTOEFLなどの成績を要求します。つまり、大学に入ってから英語を怠けることはできないのです。

人材育成のためには まずは大学入試改革から

石井 今さら素朴な疑問ですが、なぜ大学入試の仕組みを変えるのですか？

遠藤 さまざまな人材を育成するための教育を実効的に行うためです。例えば英語では、今までも中学・高校の英語学習を変えようとしてきたが成果が見えづらい。しかし大学入試自体を変えようと、高校や中学の勉強が変わらざるを得ない。もちろん課題はたくさんあ

After Interview

多様化・複線化した 教育の推進

遠藤利明さんは、教育だけではなく、スポーツにも精通している。2020東京オリンピック・パラリンピック招致議員連盟の幹事長として招致に尽力したこともその関心の深さは伺える。招致に成功した現在、改名された「推進議員連盟」の幹事長を務めている。

ご本人がスポーツマン（高校で柔道、大学でラグビー）であることもあって、さわやかなお人柄で、偉ぶったところが全くない。ただ、そういうソフトな印象とは違って、お話を聞いていると、教育改革に対する深い情熱と強い意志を感じることができた。

遠藤さんの考える教育改革は、一言で言うところ、多様化した

ます。そして今後は、現場の英語の先生は「読み」「書き」の基礎はしっかりとできているので、「話す」「聞く」という指導力を上げてほしいと思っています。

教育・複線化した教育だろう。国家戦略として国民の英語力向上を目指しながらも、子ども一人ひとりの成長スピード、興味・関心に合った教育を導入しようと考えている。

同時に、主人公である子どもたちへの配慮も欠かさない。試験制度変更に伴う混乱を最小限にするために、現時点での高校生と中学3年生には現状の試験体系で大学受験をもらうという。そのため、改革をいち早く実施しようとしながらも、4年以上先の実施を目指しているのである。

子どもたちの未来を考えた、教育改革やスポーツの振興に力を注ぐ遠藤さんからは、子どもたちへの愛情や癒しのオーラを感じ取ることができる。これからのますますの活躍を期待している。